健康な社会を考える

6人の識者がより耐性ある世界を築くためにパンデミックで得た教訓を探る

ミシェル・バチェレ

「誰一人取り残さない」は単なるスローガンではなく必要不可欠なことだ。パンデミックは国内および国家間の不平等を露呈し、深刻化させたほか、格差を放置すると人々と繁栄に莫大な犠牲をもたらすことを示した。それにも関わらず、目先のことしか考えないワクチン政策によって、開発途上国は経済的困難が悪化した一方、富裕国は経済回復の兆しを歓迎している状況だ。

より良い回復のために、人間と権利を政策の中心に据える経済が必要だ。健康や社会的保護、その他の人権に投資し、不平等と差別を抑制する経済。累進課税を採用し、労働権とディーセント・ワークを支持する経済、そして意義ある市民参加と市民社会スペースを進める経済だ。この人権に基づいた経済へのアプローチは、国連の「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の実現に向けた道のりを再始動させ、加速させるために不可欠なテコとなる。

ミシェル・バチェレ は国連人権高等弁務官。

ジェフリー・サックス

社会（ゆえに政策）は人々の経済的ニーズや身体の健康、心の健康、社会とのつながり、目的意識、政府への信頼に応じるべき、というのが幸福についての基本的な教訓だ。パンデミックは、幸福のほとんどの側面を脅かし、不安を増大させ、うつ病、社会的な孤立、そして多くの場所で政府への信頼の喪失を助長させた。

パンデミックとその余波への対応には、より多くの政府支出が必要だが、これにはふたつの課題がある。ひとつ目は、貧しい国には公共サービスの提供を増やす余裕がないため、適切な条件での増額融資や債務救済が急務であること。ふたつ目は、過去2年間のパンデミックへの対応において、多くの政府が（おそらく大半の政府が）示した以上の専門性と能力が必要であることだ。

アリストテレスは『ニコマコス倫理学』と『政治学』の一対の著作を残している。ニコマコス倫理学は主に個人の徳や家庭、そして友人について述べられており、『政治学』では市民生活について、そして公共的な教育やポリス（都市国家）の規模での社会について触れている。善である市民は善の国家につながり、善の国家（と政府）は国民の徳を促進する。そして知恵、正義、節度、正直といった徳のすべてが善い生活を支えるものだと説いた。

ジェフリー・サックスはコロンビア大学持続可能な開発センターの所長。

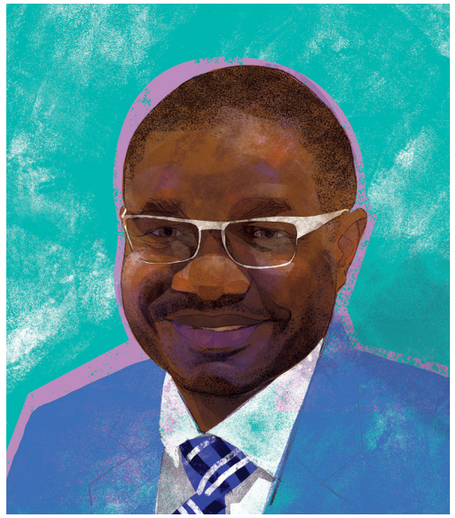
K. K. シャイラジャ

今世紀最悪の危機は、既存の保健制度を再評価し、効果的で社会的に公正な戦略を立てて将来の衛生危機に立ち向かう必要性を強調した。政府が引き続き自国の公衆衛生システムを強化し、感染を治療する許容範囲を広げることが必須である。最前線の医療従事者の心身の健康を守ることが最優先とされるべきだ。危機時には、関わり合い、透明性ある形で情報を流すことで地域の信頼を厚くすることが同じように重要である。健康の権利と医療提供者の人権の保護はすべての人のために守られるべきである。パンデミックへの包摂的な対応は、確実に誰一人残さないために、持続可能な発展のための国連2030アジェンダに沿うべきだ。

新旧の疾病の発生・再発生と、自然災害の公衆衛生の余波は避けられない。保健当局は将来の疾病や流行の影響を軽減するため、疫学の原理を応用した、十分に機能する疾病サーベイランスシステムを監視・維持するべきだ。このような積極的なアプローチは、疾病の監視や公衆衛生活動における医療従事者の教育・訓練とともに、予防的なヘルスケアサービスによってさらに補完されなければならない。グローバルヘルスの新たな課題に取り組み、人、動物、生態系の最適な健康状態を実現するために、科学的な研究データを共有するための統合的かつ協力的なワンヘルス・アプローチを推進する必要がある。

K. K. シャイラジャはインド・ケーララ州の元保健相。

アート：JOHN JAY CABUAY



クリスチャン・ハッピ

世界は新種の致死的な病原体の出現に対応する準備ができていなかった。病原体に対して、われわれは攻め始める必要があり、守りの姿勢は止めなければならない。市民の健康と福祉を確実にするために予防策が必要だ。これにはサーベイランスとリアルタイムでのデータ収集、共有のための新しいゲノムツールや技術への投資が欠かせない。

幸いなことに、民間の慈善団体、政府や国際的な保健機関などが、特に公衆衛生や感染症対策の分野で、健康と福祉に関する新たな取り組みを始めている。例として、世界保健機関によるパンデミックと疫病インテリジェンスのためのハブ（Hub for Pandemic and Epidemic Intelligence）や、ナイジェリアのリディーマー大学の感染症ゲノミクスアフリカ研究拠点（African Center of Excellence for Genomics of Infectious Disease）およびハーバード大学とマサチューセッツ工科大学のブロード研究所が共同で実施する早期警戒システムプログラム「センチネル（SENTINEL）」などがある。

パンデミックは、特にアフリカにおいて、感染症の基礎研究や橋渡し研究に投資することの重要性を強調した。パンデミックを引き起こす可能性のある病原体のほとんどはアフリカで発見されているが、これはつまりアフリカが感染症流行の予防、検出、対応するための対策やツールの開発において、世界をリードできる可能性がある。しかし、アフリカのリーダーたちにとって、これは投資の優先事項ではなかった。例えば、アフリカ諸国がこれまでにワクチンの研究開発に投資していれば、今ワクチンの寄付を待っていることはないだろう。

また、アフリカ大陸の多くの国では、バイオテクノロジーや医療用品、医薬品、ワクチンの製造に関する現地生産能力が不足しているため、脆弱だ。ありがたいことに、これらの分野への投資が再び急がれるようになっている。

クリスチャン・ハッピは、分子生物学・ゲノミクスの教授であり、感染症ゲノミクスアフリカ研究拠点（African Center of Excellence for Genomics of Infectious Disease）所長。

ケイト・ソーパー

2020年に1億2,400万人が貧困に陥ったように、パンデミックは世界的な不平等を助長した。そして最も重要な労働者を過小評価する一方、金融のエリートには多大な報酬を与えるという経済のあべこべな性質をも明らかにした。環境を誤用することが生活習慣病やパンデミックの蔓延に関与していることも示した。同時に、ロックダウンの経験は、のんびりとしたペースで欲張らずに生きることが、健康と福祉にとって有用であること、そして市民としての気持ちを活かせることを浮き彫りにした。

ここから学ぶことがあるとすれば、現在の世界秩序における富と環境における特権の大きな格差を是正することによってのみ、集団としての健康と福祉を確保できるということだ。豊かな国は今こそ、代わりとなる繁栄の政治に基づいたグリーン・ルネッサンスを推進しなければならない。地球や私たちにとってのみ悪いのではなく、時間がもっとあり、自分のためにより多くの時間を使い、もっとのんびり旅をし、モノの消費を減らすことで得られる楽しみを犠牲にしてまで過度に仕事と金稼ぎに固執する、多くの点で自己否定的な暮らし方を超えて発展していける可能性がある。

環境負荷が地球の許容能力を大幅に超えている国は、もはや世界が熱望するモデルではない。このような文化的な革命は、近年のフェミニスト運動、反人種差別運動、反植民地運動がもたらした社会変革や個人的な啓示にも匹敵するものだ。簡単に興るものではなく、現在権力を持つ者からは猛反対されることだろう。しかし、得られるものは計り知れず、得られないのであれば未来は暗澹たるものになる。

ケイト・ソーパーは、ロンドン・メトロポリタン大学名誉教授。著書に『Post-Growth Living: For an Alternative Hedonism』がある。

現在の世界秩序における富と環境における特権の大きな格差を是正することによってのみ、集団としての健康と幸福を確保できる。

マリア・デル・ロシオ・サーエンツ・マドリガル

私は医師になる訓練を受けたが、女性として初めてとなるコスタリカの保健相を4年務めた。政府で過ごしたこの間、保健分野と公共政策がどのように関わっているかについてあらゆる角度からの視点を得ることができた。保健相としての任期を終え、休暇を取得した後、コスタリカ社会保障基金の理事長に着任することとなった。これにより保健制度をまた別の視点から見ることができた。これらの役職に就いたことで、規制やサービスの提供が非常に重要である一方、人々や国民、私たちが奉仕するコミュニティーの役割を忘れてはならないと考えるようになった。彼らが意思決定の中心にいなければならないのだ。

パンデミックが私たちに教えてくれた教訓は3つあると考えている。ひとつ目は、アクセスの格差、所得の格差、不平等の格差など、既存の格差が拡大したことだ。これらはすべて、非常に明白である。ふたつ目は、ひとつ目に関連するが、公平性の向上なしに、十分な対応はできないことだ。健康面の成果だけでなく、政策形成や実施における公平性も然りである。3つ目は、コミュニティーとプライマリー・ヘルスケアの役割、つまり人々に近いところでのサービスを強化することだ。プライマリー・ヘルスケアのシステムが強化され、コミュニティーレベルでの普及が進んでいる国は、間違いなくパンデミックの間も耐性があった。 FD

マリア・デル・ロシオ・サーエンツ・マドリガルは、コスタリカ大学の健康増進の教授。